

---

# コタツを囲んで

muffin

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「タツを囲んで

### 【ΖΖtheid】

Ζ8525C

### 【作者名】

muffin

### 【あらすじ】

家族3人、「タツを囲んで、テレビは消して。さあ、始めよ。」

家族3人、コタツを囲んで。

テレビは消して。

さあ、始めましょう。

「俺、酒飲んでないからな。しらふだからな。だから、殴つてもいいんだ」

父親が、母親に確認する。母親は何も言わない。

父親がノートを開く。

「ええ……つと。まず、挨拶しなかつたな。なあ？お母さんにか、これ？」

「コタツ。コタツ。暖かい。冬の夜、温かくなつて寝つけって、お母さんがやせしく起こしてくれる。『もう、この子は……』

「自分に都合悪いことは何にも言わないんだからこの子は……」

母親が、沙里をじつと見ながら、言つ。

一ヤニヤ笑いながら、舌をペロリと出して、父親は頬杖をつくと、沈黙を決め込む。

「なんだ、何にもないのか？じゃあ、次……」

父親は一ヤニヤ笑いのまま、ノートを見る。

「お母さんが怒つたとき、口くちたえをした。」

父親、のびの奥で笑う。

「そうこうのこと、しちゃこかんだね？ なあ？ いいのか？」  
そしてまた沈黙した。

母親は、黙つて沙里をじっと見ている。

沙里は、沈黙に耐え切れなくて、つい、口を開いてしまった。

「私、口くちたえしたんじゃない。ただ、お母さん、私が言つたことと違つことを言つから、そんなことを言つてない、違う、って言つただけ……」

「なんだあ、そのいいかたあ、ああ？ そ、それが親に対する態度か、誰にものいってんだあ。口くちたえすんな」

沙里の言葉は、父親が弾けるきつかけ。行動を促す信号。

「ああ？ お前なあ、生意氣なんだよ。ちょっと頭良いと思つて、調子にのんな。社会出ればな、学校なんて関係ないんだよ」  
そもそも社会に出るそのときに関係があるのに、それを子どもに説明できないらしー。

だめだ。

ふらりと、コタツから出て沙里は立ち上がった。足に力が入らないが後ずさぬ。  
「なに逃げてんだ」

荒げた声とともに、髪をつかまれて身動き取れない沙里の顔面に父親の平手が飛んだ。

「女だからげんじつじゃないんだからな。ありがたく思えよ」「コタツの向こうに座つてずっと一人のことを見ていた母親が「あんたたち、似た者同士で仲いいね」と言った。

「座れ。お前は本当に卑怯だな」

そして髪を離されて、卑怯な沙里はコタツに入った。

「なあ、お前、おかしいなあ、しゃべらないしなあ、お前、おかしいよ」

狭いお茶の間、大きくない声量でも響き渡る、

「なあ?」

父親の一いや一やは止まらない。

母親は眉をひそめて沙里をじっと見ていく。

「お前なあ、わかつてんのか、だいたいなあ、生意気なんだ、お前

母親がときどき「そう……」とか「も、ほんと……」とか言う以外、父親がずっと何か言っている。

食事のときは無言、休みのときは菓子を食べながら黙つてテレビを見ているだけのくせに、こうこうときはずいぶんと言葉が口をついて出る。

父親の言葉を聞いているうちに、気が狂いそうな気がして、沙里はあせつた。そして、昔アニメで見た、悪い暗示をかけられたデビルマンが正気を保つために自分の体に傷をつけたシーンを思い出した。

あれだよ。

沙里は、手の皮膚の薄そうな部分に狙いを定めて右手の親指の爪を立て、力を込めた。すでに少し気が狂いかけていたのか、考えら

れないぐらいの力を込めることができた。

父親が何か言っているのか沈黙しているのかもうよくわからない。父親から死角に入るコタツ布団の陰で、左手の皮膚から透明な液体がにじみ出た。痛くない。力を込め続ける。少し痛い部分ができる、透明な液体に赤い血が混じった。

わずかな痛みよりも、力を込め続ける行為に集中することで、沙里はその場にいる自分と親との間を、少しだけ遠ざけることに成功した。

彼女はよくわかってる。

この無口で不機嫌な父親の饒舌な語りの後、何が起こるのかわかつてる。

「ゴールデンタイムのアイドル主演の人気ドラマが盛り上がりつて来週へ続く時間。

うあ、もう終わり。

残念。誰かが思っていた。少し眠い時間。明日の学校とか宿題とか、いろんなめんどうなもの。友達とか約束とか、いろんなだいじなもの。

沙里は思っていた。

早く、終われ……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8525c/>

---

コタツを囲んで

2011年10月4日06時17分発行